

パートナーシップおかや

NO. 17

岡谷市男女共同参画推進市民の会

「愛の一声」には女性の温かさが大切！～女性の委員さんを大勢増やして～

岡谷市少年愛護委員会 会長 笠原 大洋

私たち岡谷市の少年愛護委員は、選出される区の人口や世帯数により、人口の少ない区の場合には3名から大きい区の場合には6名と、委員の人数に差はありますが、21地区から推薦された71名のメンバーに、市内の8つの小学校と4つの中学校の各学校から1名の先生と、3つの高等学校の生徒指導担当の先生（合計15名の先生）に、少年警察ボランティア協会から3名の、総勢89名が市長から委嘱されて、年間を通じて地域の子どもの非行の未然防止と、青少年を有害環境から守るため、市内のパトロール活動や、担当する地区内の飲食店や酒屋さんや煙草屋さん、コンビニやゲームセンターやパチンコ店等を回り、有害環境のチェックや環境浄化と言った「地域に根差した活動」をしています。

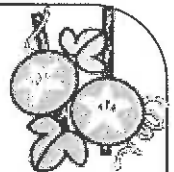
市内のパトロールに際しては、街にたむろしたり遅い時間帯に外にいる子ども達が、犯罪に巻き込まれたり自らが非行に走らないように、温かな目で接し「愛の一声」をかけることをモットーに市内を回っております。

市内21地区の委員さん71名の男女比は、男性58名・女性13名と82%が男性で女性は18%と女性の委員さんの推薦が少なく、男性に偏っているのが現状です。そのため、21の地区の内男性の委員のみで構成されている地区が13地区で、男女と一緒にパトロール活動をしている地区は8つの地区しかありません。

夜間パトロールをする中で、子ども達に声を掛けるのに男性のみですと、上からの視線でつい「威圧的」になりがちですが、女性がそこに一人でも加わることでより雰囲気柔らかくなり、特に相手が女子児童や女子生徒の場合には、母親的存在の女性の方が声を掛け易く、声を掛けられた児童や生徒もビクビクせず話の内容にも理解が生まれ、「愛の一声」には、女性の持つ温かさが大切です。

今回委嘱されている委員の任期は、平成26年4月から28年3月までの2年間の委嘱ですので、来期（28年4月～）は是非各地区で女性の委員さんに一人ずつ加わって頂き、子ども達に温かな「愛の一声」を掛ける活動ができるように、メンバー交代する各地区の委員さんや、区を取りまとめて推薦する区長さん方に人選をお願いしたいと思います。

☆ 男女共同参画週間 6月23日(月)～29日(日) ☆



今年のキャッチフレーズ “家事場のパパチカラ”

平成11年6月に「男女共同参画社会基本法」が施行され、これを記念して毎年6月23日～29日を男女共同参画週間と定められています。市民の会でも期間中イルプラザ カルチャーセンター 催事場にてパネル展示を行います。

☆ “あいとぴあ” 男女共同参画フォーラム 講演会とワークショップ ☆

講演 「妻が私を変えた日」 講師 中央大学教授 広岡 守穂さん

日時・場所 7月5日(土)10:30～15:30 県男女共同参画センター あいとぴあ



特集

☆ かがやく おかやの女性 ☆

信越ハーネス株式会社 代表取締役 岡谷市本町在住 望月 久代さん

平成 24 年度から 26 年度まで、長野県の「社員の子育て応援宣言」登録企業として認定されている、信越ハーネス（株）に社長の望月久代さんを訪ねお話をお聞きしました。

ハーネスとは、各種の配線材、ケーブルの端末加工などのことで、さまざまな家電製品や電子機器、医療機器、産業機器等に内臓配線されており需要は多いそうです。

◇ 会社設立の動機とこれまでの経過 ◇

独身時代は、銀行に勤務されていたそうですが、結婚後は公務員のご主人との間に三人の子どもに恵まれ専業主婦をされていました。下のお子さんが小学校 2 年生になった時、子どもの将来や両親のことを考えると不安になり、自分も働きたいと思い就職したそうです。1 年余りの見習い期間の中で仕事をすることに充実感を覚え、昭和 57 年 39 歳の時に女性 3 人で会社を設立し、59 年には法人格を取得、資本金も 1 千万円となったそうです。

当初は間借りをしての家内工業の状態でしたが、誠実さと努力で徐々に事業を拡大し、平成 24 年には 5 回目の移転で加茂町に新社屋を建設されました。現在、正社員 52 名パート 8 名で、その内男性は 18 名です。多くは若い女性で、継続して働いている女性はリーダー的立場で活躍されています。

◇ 会社経営の方針 ◇

自分がやりたくて始めたのだから弱音ははかない。他に協力は求めても頼らない。銀行勤務の経験から、危険な手形取引はせず固い経営を心がけ社員や顧客に迷惑をかけないようにしている。いろいろあったがその都度誠意をもって対応し理解や協力が得られた。何より相手の立場を重視し、取引企業などに対しても誠意を持って対応し、社員には働くことが楽しいと感じるように配慮しており、「良い社員」「良い会社」「良い製品」を心がけておられるとのこと。

◇ 訪問を終えて ◇

望月さんの見かけの優しさの中にひそんでいる固い信念、真摯な姿勢、たゆまぬ努力の出来る根性はどのようにして生まれたのだろうかと考えさせられました。

子どもの頃から商店を経営しておられた両親の働く姿を見て育ち、働くことの大切さを学び、子どもたちに自立して生きることを願っておられる。両親と同居していたことから子どもたちも寂しさを感じることなく、むしろ仕事に打ち込む母親の姿に尊敬の念を抱いていたに違いない。ご主人もまた公務員で単身赴任が多かったため、互いに自立し、相手の立場を理解しあっておられたことなど、仕事に専念できる環境であったのも幸いしていたのかも知れない。

来年は金婚式を迎えられるという現在もなお輝いておられるお姿に触れ、真に男女共同参画の姿を見せて頂いた思いでした。子どもを産むことの出来るのは女性だが、子どもを産むことだけが女性の役割ではなく、一人の人間として生き甲斐をもつことの大切さを改めて感じました。

訪問を終えて玄関を出る時、事務室の皆さんが全員立たれて見送ってくださった姿に、会社に寄せる皆さんの熱い思いが伝わってきました。

なお今年度は商工会議所女性会の会長に就任され益々のご活躍が期待されます。◇

◇ 最後に望月さんの夢は？ ◇

“健康で生涯現役で仕事を続けたい”

いずれ社長を降りる時がきても仕事大好きだから

最近の新聞報道からミニ情報



◇ 「パパの育休」とらない・とれないわけ ◇ 育児は妻 根強い意識

県下子育て中の20～50代の約20人のお父さんに聞いた。

職場や取引先に迷惑がかかる、周りに負担をかける、仕事より家庭が優先だと思われる、収入が減る。職場への遠慮、責任とも思えるが、どうやら本音はそもそも「育休をとりたいと思わない」ということらしい。

育児休業法が施行されて20年余の今も、共働き夫婦でも「育児は妻」という意識は根強い。働く女性は第一子出産前後に半数強が退職している。辞めた女性の3割強は仕事を続けたかったが育児・仕事との両立は困難とし、1割強の人は解雇、退職勧奨を理由に挙げた。妻が出産退職したので休む(自分が)必要がないという声が少なからずあった。民間の調査によると「制度を利用したい」と思う男性は3割に止まる。

女性が子育てをしながら働き続けるには、職場の環境も、意識も、いまだ難しい現実が背景にある。(4.10 信濃毎日新聞)

◇ 女性官僚切実な訴え ◇ 何度決められても守られないルール

国会での質問通告が前日の夕方になると、答弁書作りで帰りは明け方近く。「仕事と子育ての両立に障害となっている」と女性官僚6人の訴えには切実な思いがこもっていた。5月30日「質問の事前通告」の順守を自民党議員らに要請した。

審議を活性化するため、与野党は質問者が「2日前の正午」までに質問内容を政府側に伝えると申し合わせてきた。しかし徹底されることはなかった。与野党間の駆け引きで本会議や委員会の開催日程が直前まで決らないことや、野党が事前に手の内を見せたくないという事情も絡む。

今や霞ヶ関で働く20代前半の3割が女性官僚。5月に与野党7党が合意した国会改革案に質問の事前通告も含まれる。再び掛け声倒れに終われば、「働く女性に協力しない国会と政党」との烙印を押されるかも知れない。(6.6 末吉光太郎 読売新聞)

◇ 保育新制度 ◇ 就労下限時間 月48時間に 岡谷市

「岡谷市子ども・子育て支援事業計画」策定に向けた協議を進めている審議会は、「保育短時間」の就労下限時間を、「月48時間」とする市の案を了承した。

1日4時間、週3日程度のパート勤務の人でも認可保育所が利用できるように間口を広げる。就労形態が多様化する中、市も子育てや就労支援の姿勢をこれまで以上に打ち出した。実際にはある程度柔軟に対応している。(5.28市民新聞)



◇ どうなる少子化対策！歯止めのかからない少子化に危機感 ◇ 長野県

県は2013年度からの県政運営の指針「総合5ヵ年計画(しあわせ信州創造プラン)」で、2017年には特殊出生率を1.54人(2012年は1.51)に引き上げることを目標にしている。

また県は、昨年からの婚活を支援する個人や団体を「婚活サポーター」と認定する制度をスタートさせ、「婚活コーディネーター」を次世代サポート課に配置した。(5.25 信濃毎日新聞)

◇ 人口問題研究委員会が発足 ◇ 岡谷市

岡谷市は庁内横断的に人口減少問題について話し合う研究委員会が開かれた。歯止めをかけるための政策を検討し、早ければ来年度施策に反映させる。昭和55年62,210人をピークに減少が続き、今までも対策を講じてはきたが、少子化や社会動態の減少に歯止めをかける政策など検討していく。(5.21 市民新聞)

映画 「女たちの都」上映会 & トークショー 26・6・1
岡谷市まちづくり講座開かれる

市民の会からも映画の鑑賞とトークショーを聞きに行きました。映画を企画した福田智穂さんは、舞台は天草だが、映画を見て他人事ではなく自分が今いる場所はどうなのか考えるきっかけにしてもらいたかった。



トークショー

“女たちの都” 西堀区 高見澤 恒子

岡谷市まちづくり講座2014「女たちの都」を鑑賞した。衰退都市天草を舞台に「うつぼや」の女房を中心とした4人の女性達は、すべて反対自分中心の旦那達を尻目に、街おこし未来を切り開いて行こうと奮闘。最後は男達も次第に自分達の役割を見つけ、協力して祭りを成功させるという物語である。

男性は外で働き女性は家庭という時代は遠い過去の事。現代は男女とも互いにそれぞれの立場や力を理解しあう中で、共存していく事が大切な事だと考えさせられた。

男女共同参画社会の構築である。この映画を企画した福田智穂さんは天草の出身で、映画を制作する東京の学校を卒業後ギャラリーで働いていたが、リーマンショック後の父親の、「天草はもうだめかも知れない」の言葉に、「天草の良さを伝えたい」と映画づくりを発案、企画成功させた。「ひとりの情熱で街は変わる」という福田さんは、この映画と共に全国を回り天草の良さを紹介や、一人でもいつか周りを巻き込み大きな原動力になる事を、体験を通して語っていただいた事が印象的であった。

鮎澤区 鮎澤 美知

“女たちの都”という映画を見ました。

天草市牛深を舞台に、今や日本中でみられる少子高齢化衰退都市を課題とした映画でした。仕事をなくした元気のない高齢者たちの街、そんな中、街に元気を取り戻そうと頑張る女性たちの姿を描いたものでした。その姿はやがて娘や息子たちにも影響を及ぼし、少しずつ元気を取り戻していきました。

この映画を作り街を元気にしようと取り組んだ発案企画者の福田智穂さんと、自転車で諏訪を元気にしようと取り組んでいる、御田町サイクリングステーションマネージャー渡邊妃佐さん、ズーラ副運営委員長の宮本聡子さんのトークショーは、舞台裏がわかってとても面白かったと思います。

私も高原の街を自転車でさっそうと回る観光客を想定した街づくりを、議員になった頃より提唱していたので、同じ志を持つ妃佐さんに共感を持ちました。

映画の制作費1億円を捻出するのに奮闘したこと、今返済残金は二千万円ほどになったという話に、“すごいな”と感心させられました。「男なんてそんなもんよ。原動力は女と金」と言い切る主人公。故郷を愛する女たちの大きな愛が街を救うという女性讃歌でした。

私も岡谷が大好きです。岡谷の良さを若い人たちに伝えていくよう頑張りたいと思います。

新役員紹介 役員が代わりました。

会長	宮坂安壽恵
副会長	小池 喜代
〃	今井 和子